三國一夜物語

三

へ 13
3021
3

へ 13
3021
3

富士浅間三國一夜物語卷之三

東都　曲亭馬琴著編

昭和九年
七月一四日
購求

第三編

駿河の小雪尾張路の櫻の支

富士右門知之い五四郎が為ゐ女兒小雪を誑りそうまして只管憤ゐ堪ざるども。事終ゐせんもべなけまべ。富士太郎のちとも。ゐ。ぬ。そ。く家ゐ入り來て三雲ゐ。ち。ぐ。の物ぐ。ろ。を。三雲ハ嚮ゐ夫が五四郎を追行ーとゝろ。更ゐ。安。ら。ぐ。い。く。び。ら門邉ゐ停立其方を眺望ぐ。ら。ー。ゝ。ろ。が今ちゐ言を聞とやがて泣ぐ。ら。ゐ。ー。く。て。ち。べ。ー。ハ物ち。も。辨へ。ぐ。ら。ゐ拭へ。ぐ。ち。ち。ろ。ゐ落る涙の隙ゐ。よ。ろ。ゐ。ち。ぐ。ら。ゐ。ハ。さ。も。世ゐ中ゐ。浅。ち。ぐ。ら。ゐ。ハ女子ぐ。ら。ー。縱。證。ち。ぐ。ら。ゐ。め有。も。夫ゐ。ち。ぐ。ら。ゐ。ま。ち。を待ぐ。その人ゐ。ち。ゐ。ま。ち。ゐ。く。女兒を遍与ける愚ら。ち。ゐ。

三中

然るべきまゝ活るの子ゆゑに憂を忘れ水のまゝ流るゝ人の世。
過しかひなく。そもさん人往方をたゞして。後の富貴もねがはんやわが身と
富士太郎に洛へ上らば上りうる吾身に残りなきまゝ月星に面を繋がんとも。
小雪が先途を見究めべし。おもへば悔しき面をしらぬを繰返を。倭文の
小手巻をかくしに。公も乱るゝおろかなり。右門も道理とおもふものゝ。
験あらばそきつくりのかう。此身が愁傷さるゝまどよく思ひつきまゝ我
此度不意幸福を得てしと。強て富貴をねがはゞ只父祖の恥を
雪も絶る家を興まゝ時をうかゞふと思ふのみ。ゝるを今との一事あるを
ひて。女兒が往方頓に喜ばゞ。遅奈の罪脱ぐべく。是大なる不忠なり又國
主の威徳を借て速に五四郎を捕るとも。彼も口の長ぶつ相傳の秘書を

質とゝるゝなどをもいへべし。もしこのゝ洛に聞えそ。身を離をまゝきものを
さえ典物とゝるゝなどをもいへべし。もしこのゝ洛に聞えそ。身を離をまゝきものを
枯堂を覆を如けん。是枝を繋て樹を死し角を切て牛を斃もの悔でなし。
縦五四郎小雪を領て遠く逃を奉るとも。とさえぐ唐山の果までよも往
命めでたくのゝるゝば。環會でゆゝ已べきいくを歎きゝひそと言を竭して諭
ゞ。三雲のゝく泣てのかう。ゝるゝとも洛上つとのゝおどもゝくを
ちくぜそおくべきに思ひとしそのゝは別るゝ今の今までもはるのゝばれば
もせぎ貧き親の便るさに子を賣ねると思ひけめまべて少女を奪ふ者い。
ゝるゝぎ妓院に將て行て居多の金に代るとまく。彼ゝ遊女とゝる果しや。
飲得ぬ酒も飲るゝひ。ちゝぬ痛も殺やせん。他し枕をゝ竹の夜ぎに繁紀を

生平と共。孰あるとも岩橋の契へさこそつらうらめ。そをしも親の為ゆへと。思ふ日来の孝行を憐む神も佛も在ぎ。活地獄ゆ墮ぬるへいうる過世の報ひぞと。くき口説て泣こがれ。右門いさらうる。富士太郎も諸ともゆ。さめぐ諫とーらえて。俄頃ゆ従者を傭ゆどろ行装を整て次の日啓行のとうを國守恭範ゆ受へまるらせ。三雲を轎ゆ扶乘せて西を望てぞ旅ぢける。ゆ〜小雪をも將てゆくべいろふ〜〜るぎゆと。思へば流石故郷の餘波もいぎ惜まるて夜鶴の子ゆ後ま。雙雁の友を喪へるゆ異ゆらぎ。何とく足もまくまねどゆ志を勵し。途ゆそその人ゆあるものと思ひ〜ぶ右門も富士太郎も轎ゆ乘らぎ。徒よりしゆきとゆく程ゆ日を経て遠三の両国をも過てら。尾張ゆ熟田も近く鳴海野や。誰喚續の濱辺を行ゆ

ヒの日い小雨降らて。秋の日の暮やすく。軒端ゆ迷ふ雀色時ゆりうゆけきべ。けゆの泊ても遠らぎと。只顧路をいそぐ折しも。街曲のくさよる鈴の音高く聞え荷鞍の上ゆ人を乘て來る馬ゆりけうとの馬右門ゆやうをつと行ちぶ時馬上の人足をりて。右門が肩を丁と蹴る右門勃然ぞ瞋きべ。その人布ゆ口のゆうを縛標笠をふかく〜と大る雨衣を被たまべ。楚〜ハ見えこうねど。今蹴出〜る向脛の白やらるハ全く女子と覚きゆ。この馬ゆ引副てゆ〜男も手拭りて面を掩ひふき笠をうち載てらたる菅簑を被らる形狀五四郎ゆ肖てけきべ。右門忽地胸うちさぎ馬ゆ乘らるてゆくゆ。こう女児ゆらべきう。彼今ゆふるハねバ足をりて教くうんと思ゆよ。ぞ〜も躊躇へきゆゆ。富士太郎ゆをと注目しら先彼男を

引捕てその面を見んとするふとの男大ゐ驚きあり放ちて逃ゆくゆゑ。
是ありとうれしくて追ひつゝも声をあり立賊めりくと呼ひつけ馬士も是ゐ
害怕て忙しく馬を追やひのろとも逃まんとまるを。富士太郎走り寄りて。
その腕を無手と採向背へ引着て動せぢ。富士が後者との光景を見て何
事と思ひ辨ねど一人い馬の轡づらをとり駐め一人い主ともゐ彼男を追
蒐ぬ。あるゐその頃當国へ管領斯波義将の采地ゆゑその身へ洛ゐあり
ひとも。この地方東国の咽喉なるゐ。盗賊悪徒の防禦ゆと叢重ゆゑ。今
右門が賊めりと呼る声を聞とゆゑ。浦壇の番士走り来り忽地とれを捕め
捕めけるゆゑ右門いゆ公おちゐて番士ゐ對ひ。禮義を正しくいゆうとれゆゑ
駿河なる富士右門とのゐものゆゑ。此度ム口命を稟妻子を携て洛へ赴く

前日そまるる男が忻りて女児小雪を奪去りぬ。元来彼ハ何国の者なる
ちゆゑ。名を五四郎といひ。なる故郷ゆゑ穿鑿ゆゑ思ひ召ゐ應ド
なる身のゆゑ。ゆゑ旅ぐらしゐ今この浦曲ゐて行あひつまゆゑ。ゆゑ引
捕んとまるゐ彼いちはやく逃去りを不意も国守の威徳ゐよりて輙く
仇を捕得女児をとり復しいるるゆゑ崔躍言葉ゐ竭しゆゑゆゑ番士ゆゑて
足下上洛のゐ。豫て恭範候ゆゑその次えゆゑて美ゆゑ又五四郎と
やらんがゐゐ東海道ゐる癖者徘徊して少女を奪ゆゑ。風聞おゆゑ
ゐゆゑ。吾儕ゆゑを獲ゐゐ足下のゆゑ天下の民の害を除く公私の僥
倖ゐ。ゆゑ者奴ゐ法の如く行ゆゑ。足下ハ今弱を携て速ゐ過ゐ
ゆゑのゆゑ右門ゆゑく歓びゆゑ三雲富士太郎ゐとゆゑのゐを語ゐ

熱田の客店ゑ櫻子故を語る

ちく。たんし。の間ふ番士い彼馬士をも犇々と縛げり。三雲ハ女児をも復しゆうを聞て轎の裡より轉び出やよ小雪且くも憂ふ沈ミてさを物うゝ〜めつゝ。つゝめる乳母が思うるよう。愛子をだうゝるひて。いろを限りのあふ日とも思ひ。ちらまぢめくがれしが。親子の因うをうゝね。熱田の神の恵ふや。奇〜くとうふ。會わるハ罕なる幸ふそけるもやく下りうちて顔見せよといふもいそ〜く鎧着の。左右ふ立ちぐゝとの時已ふ日も暮ぬ。右門ハ番士の松明を借てふゝ〜女児を馬より扶おろ〜と。雨衣を脱せ笠をとり。猿鑣を外せ〜ふ。ゴ子ふハ。ぢ。年紀ハ小雪ふ似〜ゝまど。次女ハそまふもゝちまうていと艶ゝる少女の。白き赤き櫻花を摺まろ。罕衣の袖長きを被ら。涙さ〜ぐゝそついわゝまぶ。ふハ。いろふと呆まゝそ。親子三人顔うち瞻て。夢ふ夢見る心持せり

右門ハさそ悟ゝぬとのハまゝ。せ〜ぶ。忽地声を高ゆふ〜ていふ。やゝま。小雪今ハ親兄弟ゆも逢ぬまぶ。ふの歎くるやめゆ。會話ハ今宵の宿ゆそまぶ〜。誘ゝ。ゝと勵薦ゆろ手をとゝて引立つ。番士ふ厚く謝〜て。熱田のゝ〜過るゝとき。目をそぶひふ〜て捕まゝる男を見るふ。ゝまゝも五四郎ゆハ。あゝで面黒く眼圓ふ。鎌髭ゆゝ。生出ゝる荒男ゝれば。いゝ影護て足ゝやく走りるふ三雲も富士太郎もそのゝゝろを。浮ぎまぶ。まゝ〜疑ひ惑ひゆゝ。故ゆゝぬべく思ひ〜ぶ。ゝふて〜ハ問ひ。諦ぎ後方ふ立てあゆ〜やどふ。その夜ハ熱田の坊ふ宿りぬゝて右門ハ。その夜ゝり従者を遣ぎけ。親子一室ふ圓居〜て。彼少女ふ〜ゝ〜ゝれ。今日ハ身を救ひそゝふ伴ふゝ。いと奇くも思ひゝるゝんがゝれゆ〜ゝるき故

ゆるゆるうまごその仔細を語るべしといひて。此度室町殿の召に應じて。洛へ上るゆ。女児小雪と五四郎に。誰りそまーりのもとで說話てのかう。常言に暗に疑べ眼に鬼を見るとのごとく。只頼女児に逢まく思ふの故に審にも認とあるべ也身を小雪ありと思ひ詐りて。彼男を追蒐るべ憨に番士の手を借りことを捕ていと晴がましきことをちつるに今更小雪にめくぞとのひて。長く鹿忽を笑いまんも面ぐさふ。そこをうぶ子のおのーらーて。そ〳〵伴ひまるゐれ。定て洛の人みどふて。拐挈さまーるひーを。ゆまべ。親也の名をも告らず。送りまゐらせんといふに三雲も富士太郎も。やうやくその意を潟て。右門が慮の浅ゐぎつを感じけり。少子ハ飽まで庇ゆる人の言葉を受くと毎ふいく泣ぞちそゐりけるが。且ーて

いよ〳〵。嚮に救はまゐらせーとうつぶうえまも物がうて。頼を受えんと思ひ。ちふうまーくも問せーとゆふ。めるる。何を匿けるん。吾身ハ南朝の大将。橋本治部丞が女児ゆそ。名を櫻子と呼まけり母ゆいと幼くて後。父ハ前年陣没ーて。親屬。こゆ紀路に屍を曝ーるふぞ。ゐーるく。家臣村主兵助といふ夫婦のものに扶掖まゐらーしぞ城を逃出。るゆ二とせ。熊野の山里に立潜びぬまど。且開の困そうねて。主従飢に臨んとをまバ一日兵仏がいかうゐの地ハ。あまり邊鄙ゐまぶ。世ようるに便ゐー。関の東ゆ。新田殿の族も在ると受バ去来。東へ倶ーて下ぶーまいふ。主従三人其處を旗立て和泉と津国の堺ゐるとこの松原まで来るとき兵仏が妻の老曽俄頃に病で道の

次ふうちふーね折しも貯へる藥劑もなければ兵衆ハそれを買ひに来んとて只ひとり元の路ふとちうこゝらく老曽を勦りて悪も去らぬと在つるふ。彼荒男が来うらそこりきく引立りゝんとも。老曽ハ雄こゝき老女なれば病つも彼が嘗を楚と擯留て放ちをゝく。ちぐく声を揚ぬまど里へ遠き林原の行うふ人もぐ〳〵一ぐ。要ふ助る人もなし。荒男ハ大ふ怒り氷るを刀を拔て老曽が向背を下と砍ぎ。噫と叫びて仆る間ふ。ぬがてこゝらを小腋ふ抱き東を望て走り去り次の日淀とゝふ地方まで来うふ。うねて〳〵洛へ將て上らんとも思ひけ。洛ハ近曽四の出口ふ屬詑ぬ。もつぱら賊を捕るをいぐ。彼處へゆゝんハ危ーとひとうどちて。こゝハを馬ふうき乗せ旦ぬ〳〵出夕ぬ遅く宿りるふ只管路をいそぎぬ。

さまどこゝらぐ人を見ぐ声を發んるを怕きけん。そぐぬうより布をもて口をうく括標笠をふく〳〵と面を覆ひ馬士ぬ銭かりくをせて入るき郊原をる時布を緩て些の食物を与ーゆをいくたくの人ふゆふとぐ。救ひを求るふうーうーふけふーも此身こぐ乗らまこうる馬のひうをめるぎーうるひーぐ無禮うるうとも思ひうぐう。足をりて告まるうせーふも身も又その子を索るふ折のそうく救まるうせーハこうるき身の僥倖ふ付う彼兵衆ハいくふまうぐんん老曽ハ死やまうると思ふ。棚ふー船の舵を絶て真文ふぐるくのまうぐ。今ハとまぐもうるき身うをゆもうく。ゆもうまふ謀てのうまうーとうふ声も心をげる。三雲ふうく憐ぐそ。そもこゝらぐ女児ひど幸うるきものハゆうーぐを思うう。吾身一ッの秋うぐど今其

を聞いまだ痛はしくもいと悲しく付るこまもこ世の縁ゐーるゐぶ仇ー事ともおもひぞ。いろふこぶ夫さへおがさねうとの姫を勅て今の便きこと救ひまるらせば。その報ゐそこぶ子ゆも。環會ゐありもせん。ほまれくまま洛まぞ。伴ひゑうーといふこ。右門旦く沈吟して。橋本氏へ南方の大将うーしを。その女児ゐ方人せば。後難量がこーをいども。近曽南朝北朝御和睦ゐるべきよう。その使えあり。殊更女子のうるまべさのこへ忌憚ゐも及ぶまず。窮鳥懐ゐ入れば。鵠師もそこぎといふるこまも又人の子こ。いかで棄ゐる忍ぶべきまず洛へ倶してゆきとのう上聞を経てともくもをぞ考とゑば櫻子ハさらく三雲もいと欲びてその夜へ互ゐ語り明ーける。不題櫻子を拐契う荒男へ播磨の郷四郎とゑへ賊うーぶ五四郎と郷四郎と和訓も遠うーざうゐ。その積悪も脱ぎがーて。終ゐ首を刎ら是馬士ハ鞭うーまそうーき命を助りーをぞ。案下某生再説右門をハ詰朝熟田をさらそ路を走ると三日ゐしと。遂ゐ洛ゐ上り着。その日室町殿へ参アそ参着を告ぬり。家の記録ども残らぞ呈上を。義満ハ公をるゐち御覧ぎるゐ。樂譜のうち笙の巻ゐる。大食入調の両曲へ寛治元年十月下旬。新羅三郎義光朝臣。奥州下向の時。足柄山ゐそ。樂人豊原時秋ゐ傳へゐ所の秘決ゐそ。源家ゐあるてハいと愛き奇書ゐ。今改めて頂ゐうまべ秘蔵をべきよーを命せらまて。記録いちーく返ー下さまと。加之攝州住吉郡のうちゐて。二百貫文を領をべき條。御教書を賜ゐけれバ。右門ハ三世の愁眉一時ゐ開けて。深く君恩を拜

謝し。聽て津國に赴きて墨江のほとりに第宅を修理妻子をもとめ呼下して住どころとし。その身い折〻洛へ上りて室町殿に参り仕へしに義満公その誠心を感じおぼし。浅間照行に命じて富士が家の重器なりける高峯の太鼓を返させ給ふに照行大に迷惑して國辭なりしかど君命終に辭ずとて彼太鼓を出しけるがこれなりとぞ。富士を憎みて。ある時津國に住ずして私に面を會せんとのみ。さまざま照行へ年も弱くて。ひまだ妻をも娶らず。殊更父母はやく後を母の卯原が養育なしぬ。己が隨意に進止音律の外に出でず職業もなく剣法をまなびて。いと麁忽なる男なりける右門父音律に曲きのくらぐ儒學い江家菅家の流を汲て武術い義家

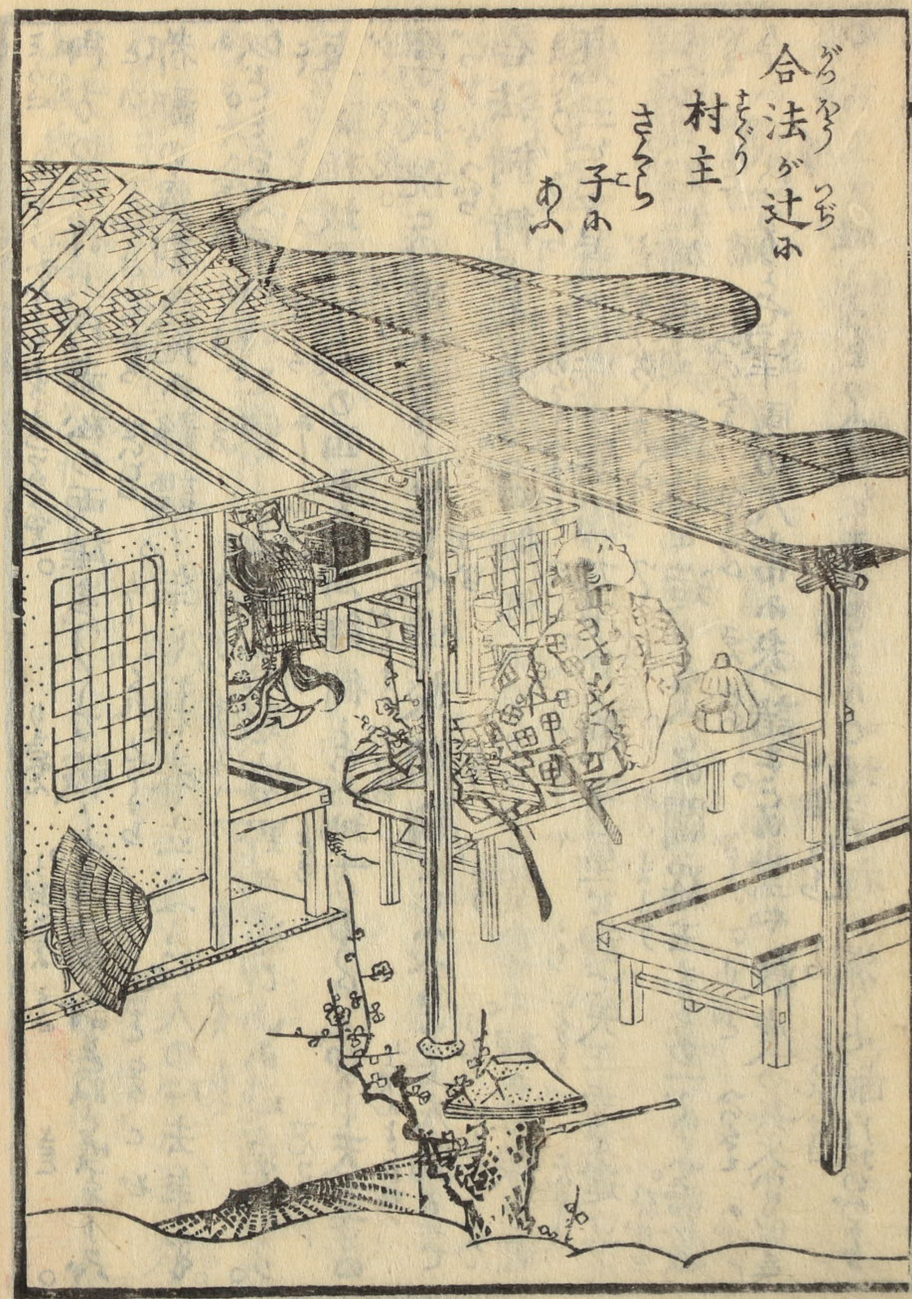
朝臣の蹟を慕ひ。その年へ初の老ふるそなのつゝ長者の風あれば管領執事をたゞ。諸家の舞樂ゆ〻るゝど。右門のゝを招きのひて浅間へあまどもるきが如くなりぬ。右門いとの序をもて。管領義將に櫻子が事を訴へ申せしに義將ゆ〻て披露あり。両三日の後右門を召て南朝の残黨とゝども女子へ公の沙汰に及ばずとて櫻子を你に下しゝるゆゑ勅りいと嚴命の趣を待へゆゑ右門歡びて。墨江に立ゝる。櫻子三雲富士太郎にあるを語りゆ雪是とう憚る所もなく彼を愛憐なるぶ子のごとく養育べ櫻子も又再生の恩を感じて右門三雲に仕るゝ更に実の父母のごとくをその年紀八十五ゆて。富士太郎ゆへ一ツおうぬ今少し年月つもらば。ゝ家の新婦にまゝと。右門夫婦へおりい

居まうとぞいと奇しき縁ゐーうりける。

第四編　古廟の焔消富士右門を焼支

年去り年来りて既ゐ四年の月日ぞ。富士太郎十八歳櫻子十七歳ゐどるまりける。右門い豫て妻ゆも相語てこぶ児が婚姻のうを都へ願聞へたり。今茲明徳元年三月上旬富士太郎ゐ櫻子を妻めらは齢へ住吉の松とともふ久しくちんうを思ひ。子孫い猪無野篠原ゆ繁昌んうを賀ぐゐ。妹夫の契りも浅くぞ。富士太郎ハその才父ゆも勝りて舞樂のうも大さ傳愛ざるうのく。櫻子も又女子のうをべき技ハまる習ひゆて。その心ざゐ賢く互ゐ志を合せて孝養更ゐ懈るうのしく。次の年の冬山名氏清謀反ーて洛もいと物忽ーうけるが義満自出馬めてとう。

御方の大将大内赤松の両雄ぢぐ〜力戰して。氏清討ぢぬとぬえーぶ都鄙の恩劇立地ゐ静謐ー。年も暮春立うるぶ人の心去年ゆも似ど。まる太平の時を樂ーまて酔翁騒客野ゐ遊び山ゐ遊ぶもかう。卓ゐ相坂の清水の西ゐ合法衢衢とのく地方めうけう。ひろー天王寺の學校院との邊ゐめりーをりて。學校衢衢とのくぎて土人訛りて合法衢衢とぞいとうるとの衢衢ゐのと古うる堂めりて。裡ゐ石像の閻魔王を安置ぢ。往古聖徳太子。弓削守屋を討て天王寺を建立ーうる日。石の佛像六萬体を造りうるとの閻羅王もその一ゐーて。霊験今ゐ灼然りて。津國の人常ゐ參詣もとの堂や。數度の兵火ゐも脱ぢ。ひく百年を経うるをりいりをぢぞ。ようて地氣裡ゐ濕して。鹹斥ものぐら


合法が辻ゐ
村主
子ゐ

焔消をとぜり。元茶堂内床を張らぞ。只石の倚子ゐ閻王を居てきゐる
石の香鉢を置のゝ。二六時中ゝえて燈明を掲るとゝゝ。ゝゝ過て
その火地上ゐ翻るゝ時い忽地焔消ゐうりて。堂を焼ぶゐうりとなりて
世の人閻魔堂とゐいぞ。しと焔消堂と稱けるとぞ。頃ゝも正月十六日ハ
閻王の齋日ゐて。参詣の老幼往来ぢべゝも度絶せぞ。この日三雲ハ
櫻子とゝもゐ一人の奴隷をゐて。合法術術ゐ詣づゐゐ日来目馴ゝ
名所も春ハ殊さらの眺望ゐ。江堀口ゐ崇峻天皇の社を拜ゝ。阿
部野ゐ兼好法師が旧趾を訪。浅緑ゐ。春ハ見えけゝ。伊勢大
輔が詠ゝる蘆間が池住とも雲ぬ千鳥鳴ゐりと。鎌倉大臣のゝ
ゐひけん。阿部野の西の阿閑嶋も雨ゐやゐぐむ萱艸塚秋ゐて鳴

松虫塚家隆の墳ゐと見巡るゐ春日も夕陽山ゐ沒りゝぢべゝ。いざゝうりゐん
ゐて。住吉のゝえゆゝ道次ゐゐ。延を布て。編笠をふゝゝ。申樂の謡曲ゐ
小鼓をゐハせて。往来の人ゐ一銭をゐりゐのゐりけゝ。ゐとも由緒ゐゐ武
士の落魂ゐるゐと。憐ゐもゐぶゝ。櫻子いとゐやゝうをゐるゐとゐその人
うち仰ぎゐるゐ笠の隙よりゐのゐゐ見ゐぢ。まゐぶべくもゐゐ家臣村主兵
衛ゐり。立ゐとハいゐゐと。驚ゐとも。外の人目を恥らひて。言葉をゐりけゐ。櫻子ゐ
いとゐゐゝゝく忙ゝく。走りゐひそゐゐゐ三雲ゐ對て。目今彼所ゐて見ゐゐん。
隙て物ゐりゐゝまゐゝせゐる。村主兵衛ゐ付ゐるとゐゐハ三雲もうち驚て
そハゐゐゝとくも見ゐやまちゐゐハざゝゝ。従者を遣てとゝへゐ招きよせん
ゐどゐゐ間ゐ兵衛ゐ聽て参りけゐハ。まゐとゐゐとへとゐひゐけて。諸ともゐ

茶店の奥まりたる處に憩ひ何とも言葉はなくして坐に懐旧の涙を
はらはらと且つは櫻子がいとゆう出身を思の松原に[illegible]買に立入
つゝ折しもいとおどろ〳〵しき荒男が来りて[illegible]曽さよ仕[illegible]
奪ひとりて遠く東路へ走りけるに尾張の熱田に富士右門と
いふ人に救はれまゐらせてふかき庇に蒙り今はその愛子に齊眉て新
婦てふ名さへ呼ばれる是ひとへに姑御のそおかげぞやさて老曽いかに
ありつるは身へ又なぞそ斯い零落るいとかなしきよべ兵助へ涙を
うき拂ひてそまぶ〳〵往年彼地にて藥買りて立ちかへりしに[illegible]
鮮血駁〳〵く翻まて姫も妻も見えぬとはいふと騒慌西の方より来
人に問へば。その人のいふく今年紀四十あまりの老女向背を切きるが。

その疾ふもよりまぎ南西の徑を走りゆくを見つるとのふさてへ山客などに出會
若曽へ疾を負て姫を奪ひ去りまゐらべそを追蒐て行つゝんとおもへ来べしも高
たへぐきふめいわべ既にその途條へ走り去らんときる折しも又東の方より来る
人あり。その人は身何ぞ慌ふ今来る路ゆて奇怪男が年紀十四五なる
少女をわて住吉のゝ之行を見ぬ。これを本索のよとのふ於てふたび思へ
ゆう。賊へ姫を奪て東へ走りつゝんが老曽へ切伏らまゐ時。その往方を見ぬ
南西の徑に走去うぬと思ひ[illegible]彼路條へ追行つゝ妻へそれゆて死ば
死ね姫とそ心ゆるけまゐと足を踏ゆ〳〵つ。住吉のとるまゐまで追蒐つるふ。その
人へ絶て陰ぞふ見えぬ人に問ども[illegible]石へ[illegible]ものもうけまゐ。ゆ〳〵ぞ悔
てるゆやと疑惑てゆゝる齟齬。又界のゝ之走り歸るとき日も昏夜ふさく

深ぬまど盡夜彼此を呻吟。六十日だろう八。和泉と津国の間を索遠を
ぶも姫ハさしろう妻の老曽ふもゆるるけ共ハいろふともせんをべなくて。肚
切べやと思ひ。ひ。ろ。しろの儘ふそ自殺ス。黄泉ふ在を相公ふ見を、のひ解ふ
言ゆ。只顯身の息のうちハ姫を索まるとせそうべ誠忠を全をべく思ひ復。
そをとろう諸国を經歴して名ゆる神社浮身の宿をべて人の會合ところへ
落もゆく索廻まども四年のけよ至るまで環會まるとせど月日ハを為ふ
照ゆふぬると恨をふ神も佛も捐ゆハでその恙ゆを見ゆをまるゆ而已
うとぞ。由緒ある家ふ縁ふ結びゆひゆ禍却て福とゆりぬ。是併男姑
ゆの深き庇ふ因ゆるゆと一五一十說話只管三雲を拜ける櫻子ハこれを
聞て老曽が路ふ死つゆんと思ふ涙をゆう落て果敢ゆゆ回答ぶせど。

三雲も志ゆ志のゆと信ゆゆきふ憐ゆまるゆ。兵衛ふ對てのゆう。櫻子ゆの
ゆをゆきべの物ゆうゆをゆ。一朝ゆ竭ゆゆ。ゆ細ふハ後ふとをとのひて茶
を。店を退出ゆるゆう遊ゆゆて墨江ふ立ゆう。右門富士太郎ふ備由を告て。
兵衛を見ゆをけまゆ。右門父子只顧彼夫婦が誠忠を感ゆ賞。ゆが
家外ふ族もゆく。又ゆる家臣ゆも養ゆるを。本意ゆくも思ひつふゆる
人を浮ゆことを大ゆる僥倖ゆまとを。ゆとり兵衛を扶持ゆてゆう。懇ふ頼
ゆをゆえゆゆ。兵衛もゆ主をゆ仕へて。ゆう信ゆふを見えけゆ。不題洛ふ去年の
十二月廿九日山名氏清退治のゆちを残黨ゆ不近国ふ隠ゆひて室町殿を
傾ゆまゆうゆんと謀ゆゆ風聞ゆをゆて。防。長豊。筑。四箇国の守大内左
京權大夫義弘。播。作。両国の守赤松上總ふ義則。命を稟て今茲

二月の頃より摂州猫間川のほとりに陣し。西国の通路を標てゝ非常を禁らるゝなど寄へき敵もなく。攻べき城もなければ大内赤松の両大将陣中の徒然に堪ねて舞樂を催し。暫時の鬱懇をなぐさめとなす。富士右門知之あり又天王寺の荒陵に浅間左二門照行国墨江に富士右門知之あり又天王寺の荒陵に浅間左二門照行いづれも名さる侍人ばかりなり。富士浅間をぞ召具したる。赤松行へ右門が毀跡てより。諸矣の舞樂ゆゑとて招るゝ。赤松義則の家臣室積平馬といふものハ浅間が母卯原が甥なれ照行に従弟なれば平馬只管主君に薦て此度の樂師に加へらるゝより。其前日平馬へ照行に消息して。ひそかの旨を告ぬるなど。照行後ひて思ふやう。富士とうれしく遺恨既に久しきに明日彼と共に猫間の陣中に

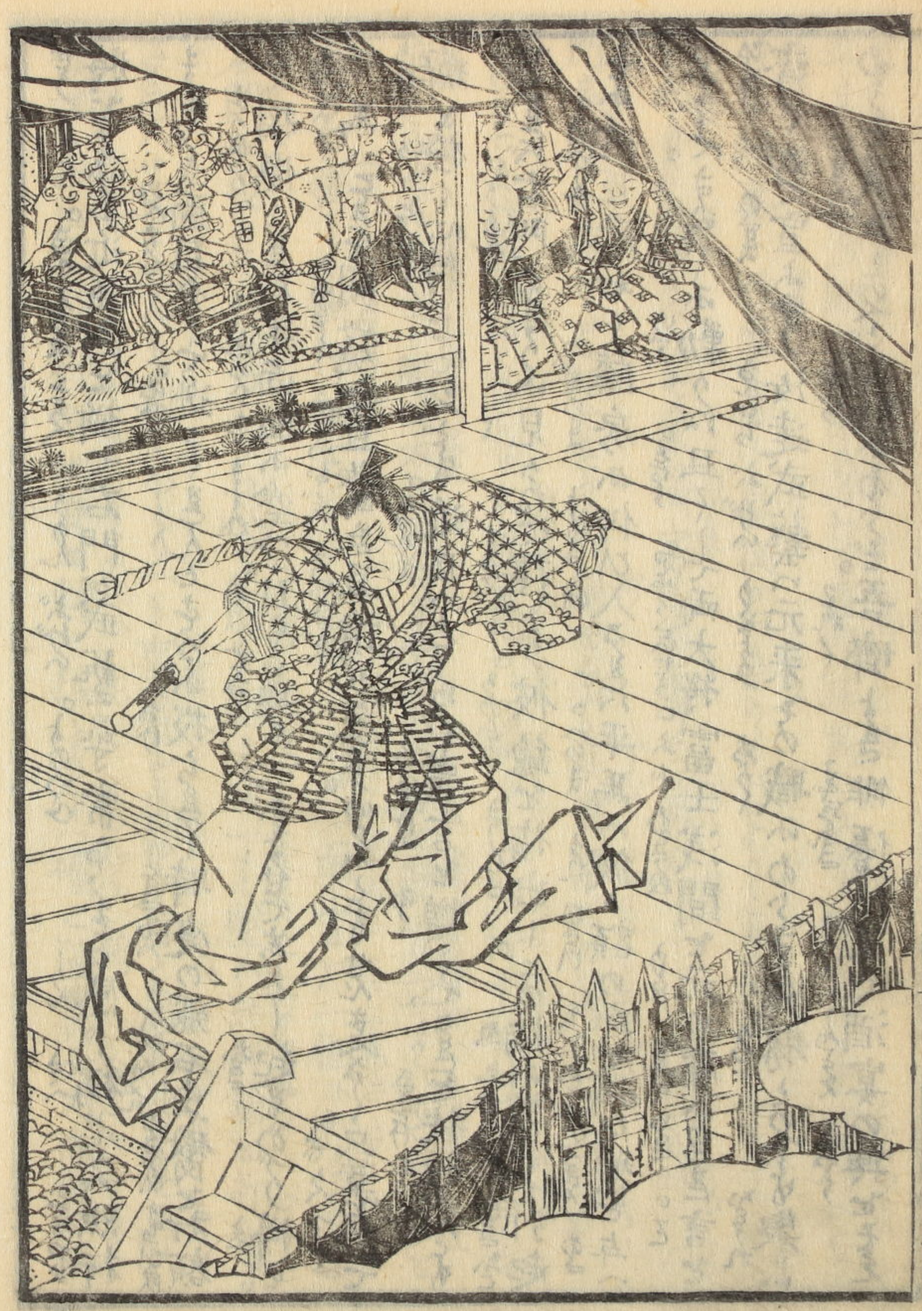
参るこそ侘ぶ言に。談て恥辱を与へ。無礼の過言せば。くゝき目見せんとひそかに。次の日花麗に打扮て。猫間川に参りしに程なく富士右門も来る。斯て盡日の舞樂も果て両大将酒宴を設けるに盃の数もすくなう時。浅間照行が以ての和漢陣中に舞樂を奏するの例なし。就中漢楚鴻門の會に項伯項荘剣を舞て賀しもて。彼二人の舞樂をもうて剣法をぞ項荘も沛公を討とするの心つゞ。項伯もとより防とするゝ。王項伯項荘ハ楚王の親戚なれども忠義の為に伶倫の伎をも辞せず。君の禄を食のハ。誰か知らざるべけんや。今の世音律の家に生まれ武芸のたゝかひの照行が外に絶て世も及ぶ。況きのふけふまで鋤鍬を活業と

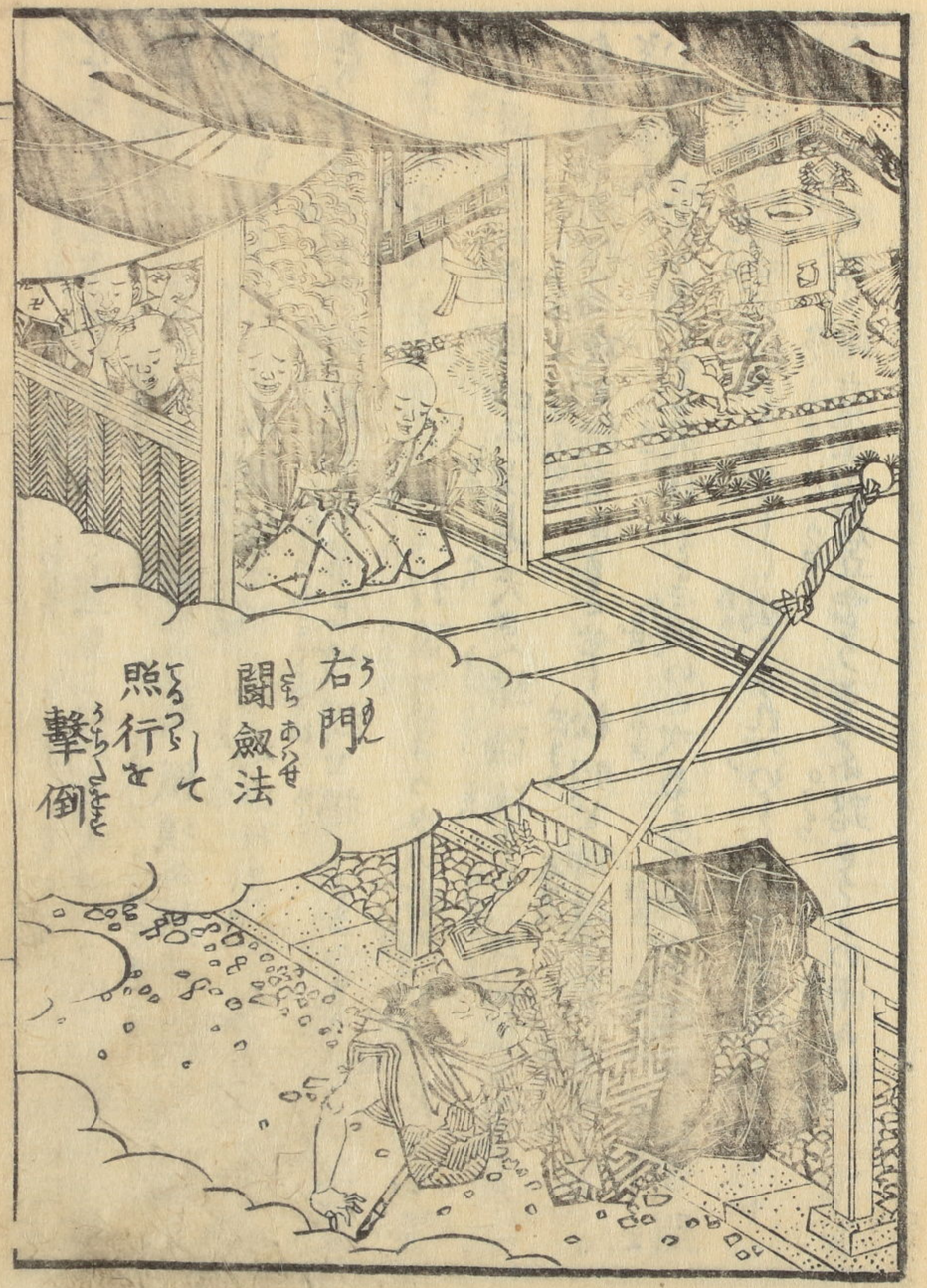
せしめん太刀ぬくまもあらばこそ。ふかめくぶいと右門をそばひに見やりて。鼻の
あらうもどめさそ。いとやとうふいとりけまし。右門実てとハまこふ恥と見せんこと。
うくいいとよと猜し。莞爾としてのたまう。剣ハ身を護をもて貴しとす。鴻門の
會ハ姑ハ凶禮ともいふべし。あらハわまじ。神樂ハ剣を用ゐハ悪鬼を祓ふの
謂あり。吾儕ハ人ハうとも。事ハ臨て君の爲ハ一命を擲試忠を表す
志ハ孰ハ劣るべうもあらぬ。聞ずや建武の擾亂ハ山門法師の青衆
なんとハ戰しに頃寂を潔さあらんを天下の樂人照行の如ハ武藝の
ところ比ぶるしとハ傍痛くとをといつよ照行と人ぬ壯佼ハ忽地肘を張
小膝をまくるこハ不思議ある言を吐ものかな。足下寔ハ武藝をきわめられ
今闘剣法しと。眼前ハ勝負を試きらべしそ時後悔ありひそと声高

ゆふ集煙ハ右門ハ彼ハ對家ハあらんも。大人氣ありとハ思ひあぐ。固辞を
憶しいうとせるるも朽をいうけんと深念し。今足下と剣法を試んの聊も
難うらぶ。但貴人の酬會ハけうそうるうぎをせんのとも畏け見べうく両大
將の命ハ從ひなるべきとのひら。自若として騒ぐ氣色なし。義弘義則ハ前
よううち聞てハせしこの光景を繍ゝてとハ珍うある見物あるこを興じ
あひさらべ両人ハ闘剣法を見て頃日の鬱氣をも散まべし。陣中ハれば真
剣のくゝめそうるべき木刀もあらぬ。彼首の鎗牙を除き箇様くハ拵へて。
富士浅間ハ与へよと命をれば。近臣うけあうう廊ハうけうまうる鎗二條の
牙を拔捨。纏槍の上を布りていく重も巻て鞠の如く括標をを両人ハ遍与し
けまべ。照行この鎗を取て。廣椽ハ走り出袴のそべ高く抓あげて。勢ひ猛く

立さうけ。彼浅間が従弟なりける。室積平馬へとのゐをまぐれて。遂侍はゐ
けるが給事が往來する小扈従ども。只今うるはしくうち語ひうちらり行ふ
と心りとなけまべひそうふ隣房まで来うつ。幕の間よりまをを見る時ふ右
門ちづやうふ座をうちそ。そまぐーへ鎗をゆゝと及ぎ。樂人の鬪剣法ふへ手則
のこそよけまとひうどち。太鼓の抱只一ツをもちて。照行ふ立ひうべ。近臣ども
阽ゝそさそも富士が瞻の太さよとさうやきけり。斯て雙方立ならん互ふやと声を
うつると齊ーく照行鎗をつきうくと冈ー右門が面上を只一衝ふ刺んとまうふ。
右門抱ゆとんひ除つとうち入つそ腕を癬むう丁と撃べ照行鎗を打落
さまと大ふ慌て組んとまるをやうへも寄着を沓やう身とふ兵法をも再び
撲地と投出まふ照行忽地身を轉ー椽よう下へ磴と隨まべ大内赤松の両

将をとゞめ近臣声を揃て右門が武藝尋常ならぬと感ー稱ーべ照行
まもう〜面目なくて逃ーくまんとまうふ投らまー時庭の飛石ふて髏を打額
を揭傷ーまべ半面血ふ塗つ目も鼻も一ツふよせてあぢーー起もめぐり悔ど。
平馬ハこまを闕窺て且驚き且憤りながらふもせんまべるーー只華を隔て
癬を搔く心持をとゞ。近臣ども。近臣ちどもの廣言を憎ゝそ。まを扶起えんと
せまべ右門ゆまうふ見うねて椽よう彼鎗を指出ーとの柄ふ携ゆて引起
まふ近臣ちやく隣房の伴ひ入うまべ平馬ハ彼が額の血を拭ひ藥を与へ
ねどうて。さるべーふ勸りぬ且くーして西大将富士浅間を元の席ふ召まを言を
齊くまそ宣ふやう。汝達武藝い元来その職ふゆうざまべ勝とゞ譽ふ
ゆうぎ員ゑとゞも恥ふゆうぎ。吾齊よき俳優を見て酒宴の興をそそ




右門
闇斂法
照行を
撃倒

なまべ。と是當座の引出物なりと宣ひて右門に太刀一口照行に鎗一條を賜ひけるさまど照行いと面をけまべ俄頃に病着發りぬと偽り酒宴もいまゞ果ざるに彼鎗を賜りて退出けまべ。いと人の胡慮と成まり。〳〵て日もや向暮と一七席上燈燭を掲るときに成もうしべ夜飲ハあまうに酔興なるべしとて両大将盃をあさらのひ右門も暇のゝうて陣中を退きしに赤烏西に沒し七天さえ結陰頃しも二月廿五日のゝれべ。あやかりうね烏夜を。従者にもとさせ〜松明を郷導とし。主従こぞるも小坂清水のとゞまで来けるとき風いと吹わまて雨さえ降出し初電間〳〵閃きて。雷さへおどろ〳〵しく鳴ときれべいと〳〵路をいそぎ〳〵らうドて今法衛衛なる閻魔堂に笠やどりさるに路まゞ〳〵の雨に松明もうち

消さまとうれべ〳〵ていりうに夜もいまゞ更じとおぼのまべ汝ハ天王寺の在家に行きて簑笠手火なと物など買ひて来よと命じて従者を走らせ。右門いりうに憩ひ居るに簷さえ狭き古堂なれべ。とく〳〵雨を凌うれ。聽て堂内に入りて是を避んとするに其處へさえ風のまに〳〵雨も吹入まべ。裡より門扉を引よせてもるに風にあらておのづから開を石の香銭櫃を倚りけてこまを遮ぎらひとり石像のまえについゐて従者が帰を俟に雨ハゆうやくをやまのけり。浩處に浅間照行に富士が帰るを待伏しけに遺恨をたらもべく思ひけまべ。俱しる僕をべ途ようく〳〵その身に一心寺の邊に隠まま居て狙撃とせしに雨いと〳〵降出て右門主従忙〳〵走るうれべ。その便宜をいとど空〳〵鎗を引提てその跡を慕ひ来けるに只今右門が

閻魔堂ハ笠やどりして従者をゞ元の路へゝるを見て大ハ歎び蚤ハ
窺ひよりて堂の格子の間ハ鎗を指つけ裡ハそ蚤を案内とし鬼もを
そぐさと刺をと右門こやく身を披ゞ牙先くゝひて閻王の石の倚子
ゆゞ突當る金石撃して出る火の炎と翻まて地上る焔消ハうると
見そゞ忽地地雷の炎るゞゞく山も崩ゆゞりの音して古堂もゝくハ
一團の火焔とりて燃上まゞ哀ゞ富士右門焔の中ハ身を焦し灰
燼とりてうせハけり。照行ハ堂内よりう猛火の燃出るハ驚きそ遠く
走り退くも不用意ハして火攻し輙く右門を殺しゆるを歎びその焼
落るを眺居ゝる折しも富士が従者へゝくとも走ぎ簑笠を買もて
ゝるハ合法術術ハめゝりて忽地煇の炎るを怪ミ間ぢく走り来る時

火ハ扇くとして昼のゞく明きハと見まゞ彼首の樹下ハ浅間照行
鎗ハ携り悠然として停立ゝるそハ主人ハ堂内ハゆゝて焼殺されまゞ
けん。讐敵ハまきゝく者奴ゝと認めゝれゝひそゝハ田畷をまゝり道しゝゝ
ぎそ墨江ハ走りくゝり息もつぎあゝぎ。ゝるぞ畏皆こへ
いハと驚きさゝぎ泣ミ悲しゝゝるを所をゝゝぎゝるハ富士太郎ハこの凶事を
聞とゞをゞ力をとりて跨ミ彼奴隷をゝゝそ合法術術へ走り行ぬこハ
村主兵ハ近屬ハ山の病着炎り腰痛て堪ゝぎけまゞこの夜も富士
太郎ハ従ひ行をゝゝゝぎ心ゝゝぎも残り留りゞ病をゝのぎそ病牀を
起出三雲櫻子ハ力を添さゝ慰こゝらくハまゞ富士太郎がこゝのと
心をゝくして更ゆく鐘を數まゞ。ゝや丑三ハぞゝまりけるこの時浅間

照行へ富士が一家を切場。高峯の大鼓をも奪ひとりて後身を何
地にも匿さんと思ひしかば堂の焼落るを見終りて墨江に趨く路
まぐら。富士太郎もに行あひつらんが野干玉の暗夜なれば互ひに
ちらぐしと照行逢ふ右門が弟宅に潜び行外面めて窺へば只今裡
より出る人ありと見えて門の扉細目に開きて遠く女子の泣声聞
まへ折とをよけまと黙頭つ。鎗をば門外に投捨刀を握りもちて奥深く
走り行き三雲主従が圓居しる。隔の紙搭をさと押ひらきて驀地に切て蒐る。
思ひもらけぬるうれば三雲櫻子へ噫と叫びて走り退く間に村主へ主の槍に
ろう。蹇る足を踏ふかし。照行を外隔ちて挑戦ふとのへども病疲れる
老人の夜へ見る目を定らで。打太刀もちどろうまで既に居夏の深疲を

負ね櫻子元来怜利けまへとの光景を見るとやて三雲を引て樓に走登り
細き肘も手弱女の力をとりて究めて高峯の大鼓を打ならせば會稽城の
鼓ゆも劣らぬ樂器の殊さとりて夜へ静ゆそ胖響もゆく遠く響て程に。
近隣の人とへ何ぞと騒ぎ立富士が弟宅に會合来まへ照行是に驚き
怕まへ刀を引て逃去りしぶ兵仗へ後の一太刀炙所の深手うまへ醫療も験なく
暁に緯断しりさまへ村主へ病て敵しぐ[illegible]を[illegible]へども雙人を拄へて
主を救ひ櫻子へ又姑に過めらんと阽に大鼓を鳴して雙人を追へ仇を見て
命に捨仇に會て生を全を彼とへ是とへ忠孝更に比類なしと世の人
深く感じけるとぞ。